
詐欺男をさがし出せ ～千鶴と美里の仲良し事件簿～

とが・みきた

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

詐欺男をさがし出せ　く千鶴と美里の仲良し事件簿く

【Nコード】

N2065V

【作者名】

とが・みきた

【あらすじ】

今回は、気のやさしい美里が下校途中に出会った男の依頼を引き受けたことから始まる事件です。くやしい思いをさせられた彼女は、千鶴といっしょに捜査を開始します。さて、その結末は。

「ちょっとお嬢ちゃん、助けてんか」

歩道を歩いていた美里は、男の声に足を止めた。

振り返ると、国道とを分ける植え込みに中年の男が倒れこんでいた。生垣の割れ目にいたので、横倒しになった自転車だけが見え、人が下敷きになっているのに気づかなかった。

あわてて駆け寄り、覆いかぶさっていた自転車を立ててやると、男は足をさすりさすり、はい出してきた。

「おおきに、おおきに。走ってたら、急に大きな犬が飛び出してきた吠えられたもんやからびびくりしてもうて」

体についた土を払いながら立ち上がった男は、礼を言い、自転車に乗ろうとしたとたん、「あいたッ」と叫んで、再びその場へしゃがみ込んだ。

「どうしたん、立たれへんの。大丈夫？」

気のやさしい美里は、心配してのぞき込んだ。

「あ、足をくじいてしもうたらしいわ。仕事で急がなあかんのに、行かれへんがな。弱ったなあ」

みけんにシワを寄せて、男は時計を見た。

「えらいこっちゃ、いま時分待つとるんやろ。約束の時間に遅れたうえにこれや」

と、彼は情けなさそうな声を出した。商談の待ち合わせでもあるのだろう、あせっているように見えた。

しばらく足をさすっていたが、突然彼は美里の方を向き直った。

「そや、すまんけど、あんたちよとおつかいに行ってきたくれへんか」

「えっ、どこへ？」

少女は、見知らぬ大人からの頼みに驚いた。

「いいや、すぐ近くやねん。地図渡すさかい物をもうて来てほしいんや。小さなもんやからあんたでも大丈夫や。それでな、行ってみらうとこは」

行くとも行かんとも返事をしていないのに男は紙片を取り出し、押し付けてきた。彼女は不安そうにながめたが、そこにかかれていた地図と家の名前を見たときたん声を上げた。

「この家知ってる。お重さんというおばあちゃんの長屋やわ」

これを聞いた男は、偶然に驚きながらも喜んだ。

「そうか、ほんならちようどエエ。おばあちゃんにはもう連絡してあるさかいにな。電話したおっちゃん困ってて取りに来られへんから、ウチ渡してくるっちゅうてももうて来てくれたらええねん。え、そうか、そうか。ありがと、ありがと。ほな、頼むワ」

男はひとりでしゃべり、ひとりで答えた。無理やり頼み事を聞かそうというハラに思えたが、行き先が知り合いでもあり、困っている人の助けだと思い、美里はうなずいた。

「ワシ、ここで待ってるから、頼むで」

早足に立ち去って行く彼女に男は声をかけると、なぜかニヤリとほくそ笑んだ。

二

「おばあちゃん！」

「あ、びっくりした。なんや、美里ちゃんやないか。きょうは一人か」

路地裏長屋の玄関先に立っていたお重さんは、突然飛び込んできた少女に驚きの声を上げた。

「うん、ちづちゃん、今日は校門のところでお母ちゃんと待ち合わせして、いっしょに買いもんに行ったから、ウチ一人やねん」

美里は、仲良し二人組である千鶴の祖父がこの長屋に住んでいる関係からお重さんとは以前から顔なじみなのである。

「おばあちゃん、きょうウチ用事があつて来たん。あのね」

話しかける彼女を、わきへ寄せるようにして、お重さんは通りの方へ首を伸ばした。

「あのう、おばあ……」

そでを引つ張られたお重さんはわずらわしそうにした。

「ちょっと待ってんか。いま大事な用があつて、あんたの相手してられへんねん。あとでまた来てんか」

そう言つて通りへ出かけた彼女を、美里が呼び止めた。

「その用事で来たん。おっちゃんから物をもろうてくるように頼まれて来てん」

「ええっ、何やて」

やつとまともに話しかけてきたお重さんに、美里はいきさつを話した。

「そうやったんか。いや、えらい遅いからどないしたんかと思うとつてん。そうかあ、そやけど大事なもんやから、あんたみたいな子供に預けてもなあ」

事情はわかったものの、お重さんは困惑の表情を見せた。

「というても、内職で近所の子供を預かつてるから、ほったらかして家を空けるわけにもいかんし」

くちびるをかんだ彼女はしばらく考え込んでいたが、美里をじつと見つめ直し、真剣な表情でたずねた。

「ほな、預かつてくれるか。そのおっちゃんにちゃんと渡すんやでできるか。間違いないか。領収書もろうてくるんやで」

言われた小学三年生の少女は、どんとたたいた胸を張った。

先に電話も掛かつてきているし、話に矛盾はない。通りを曲がった、つい目と鼻の先までのことだから、この子でも大丈夫だろう。そう思つてお重さんは大事な紙包みを託した。

「おっちゃん、もろて来たで」

首を長くして待っていた男のところへ駆け戻った美里は、息をはずませ預かり物を手渡した。

「はい、これ封筒」

子供から包みを受け取った彼は、労をねぎらうかのように彼女の頭をなでながら口もとにいやらしい笑みを浮かべた。

「おおきに、おおきに。ほな、領収書と、それから、これはお駄賃や。そこのお菓子屋で買うといたんや。チラリチョコやで。いやあ、助かったワ。賢いなあ、あんたみたいな子供がこんな大事なお使いできるやなんて。おっちゃん感心したわ。こんどセンセに会うたら、こんなエエ子がいましたで、報告しとかんとあかんなあ」

子供相手に大層なおべんちゃらを言うのと、彼はそそくさと自転車に打ちまたがり、あっという間に走り去ってしまった。

あれだけ足を痛そうにしてた男の行動にしてはおかしかったが、もらったチョコレートの方に神経が集中していた美里は、そのとき何らの不審も抱かず、お菓子を口に運ぶことの方に忙しかった。

三

「ウチ、親切でやったのに、うわーん」

「みさちゃんが悪いんとちゃう。あんたは、ただ頼まれただけや。何もあかんこととしてへん。そやから、泣かんでもええ」

「そんなん言うたかて、ウチさえあの封筒を持って行かんかったら、おばあちゃんは、お金取られんでよかったんや。ウチは犯罪者や、大悪人やー」

「おばあちゃんかて、美里ちゃんに何も責任ないて言うてるやんか。犯人が直接来ても、お金を渡していたやろって。な、な、泣きやみな、な」

ここは千鶴の祖父、徳治の家である。

いま、その長屋で千鶴と徳治が美里をなぐさめているまっ最中である。詐欺犯は、何も知らぬ美里を使って、隣に住むお重さんの金をだまし取ったのだ。

その隣家へ電話がかかってきたのは前日だった。

「お宅の改築修理もやっと終了いたしました。ありがとうございます。つきましては、お支払いのご連絡を」

自宅は戦前に建てられたものだ。あちらこちら傷んではいるものの、なかなか手を入れることができなかったが、少しばかり貯金もたまったので、思い切って小修理を頼んだ。

「支払いは来月の年金支給日でエエっちゅうとったんちゃうんかいな」

彼女は不満げに答えた。

「もちろん、それで結構なのでございますが、今月は当店の決算期になっておりまして、いま現金でお支払いいただくと、代金が一割引きとなっておりますので、お得かと思ひまして」

女は何割引とかポイントとかいう言葉に弱い。

「い、一割引っちゅうたら、10%引きかいな。ほ、ほ、ほんなら、さ、さ、さ、三十万円の一割引きで二十な、な、な七万円でエエんかいな」

興奮で舌がもつれてしまっている。

「はい、本日中に現金をご用意いただきますと、当店の係員が頂戴に上がります」

「払う、払いま。いますぐ郵便局へ行って下ろしてきまっさかい、昼から来ておくんなはれ」

金色夜叉の宮さんが、浅はかにもダイヤモンドに目がくらんだように、一割引という言葉に彼女も何の疑いもなく飛びついてしまった。

だが、彼女を軽薄だとそしめるのには無理があろう。改修してもらって代金を取りにくるという電話があれば、それを詐欺ではないかと疑えという方が難しい。

その工務店の社員を待っているところへ現れたのが美里だった。実は、改築中の家を物色、年寄りの一人住まいを確認してから、表札や電話帳、老人会名簿などから番号を割り出して、代金をだまし取るという新手の詐欺だった。

犯人は、自分は姿を見せず、子供を利用して金をせしめるという卑劣な方法を考え出した。

その手先選ばれたのが、下校中の美里だったのである。

警察の調べから帰ってきた美里を囲んでのなぐさめも、詐欺団のパシリにされた彼女はくやしさと被害者に対するすまなさで、聞く耳もなく、泣き叫んでいたのだった。

「でも、おばあちゃん、よっぽどショックやったみたい」

友を気づかいながらも、千鶴はついぼつりとため息もらした。

「独り暮らしは、金だけが頼りやよってになあ」

徳治は答えた。

「家族いてはれへんの」

祖父は首をひねるようにして答えた。

「いっぺん結婚して別れたらしい。息子がおったけど死んだとか、行方不明になったとか、もうひとつはつきりしたことはわからんねん。言うときによってまちまちなんや」

わずかの年金から、爪に火をともすようにしてためた虎の子だった。

例を挙げると、毎日一枚食べていた朝食のトーストを半分にした、ただし厚みは倍で。

それでは何の足しにもならないではないかと言われそうだが、それは素人の浅はかさ。

バターが半分ですむ。その上、おなか減らなくてすむという究極の節約術だ。

そこまでしてためた大事な貯金をむざむざとだまし取られてしまったのである。

「やっぱり、ウチの責任や。死んだら地獄へしか行かれへん」

「大丈夫や。カンダタみたいにな、お釈迦さまが蜘蛛の糸をたらして助けてくれるから安心しい」

徳治のいらぬひと言に、美里の泣き声が、また一段と高くなった。

四

その日から美里は、男を捜し始めた。

学校から帰ると、友達の遊ぼうという誘いも断って街中を歩き回った。犯人はそう遠くに住んでいないのではないかと当たりをつけたのである。

というのは、倒れてさすっていた足がサンダル履きだったからだ。痛そうに抱え込んでいるのをのぞき込んだからしつかり覚えている。遠くからだと、スニーカーなり靴なりをはいて来るだろう。獲物をあさるのに周辺をうろつき、工事完了を確認しているはずだから、何度も周辺をうろついていたのにちがいない。となると、そう離れたところの人間ではないのではないかと考えたのである。

だが、やみくもに歩き回っただけで、そう簡単に犯人と出会えるはずもない。自分でも、こんな方法で見つけられるとは思えなかったが、何もせずにじっとしてはいられなかった。

彼女をこのような懸命の行動に駆りたてたのは、自責の念からだけではない。もうひとつの大きな理由があった。

調べのとき、ドアの陰から「あんな頼りない子供では、聞いても役に立たんのとちゃうか」という声もれてきたからだだった。これが、彼女のプライドをいたく傷つけ、闘争心を燃え立たせた。

だが、いくら気力満々でも、行き当たりばったりのこの方法では、事件解決への糸口さえ見つけられないのは明らかだった。一週間もすると、疲れが出て目が落ちくぼんできた。

「みさちゃん、無理したら体こわすで」

千鶴のいたわりに、彼女は唇をかんだ。

「おばあちゃんのげっそりした顔を見たら、たまらんねん。なんとかして犯人をさがし出したらんと。ウチの責任もあるし、カンダタも最後は、また地獄へ落ちてしもうたし」

徳治の軽口が、彼女の心に相当影を落としているようだった。

「でも、そのやり方ではうまいこといけへんと思うわ。何かほかの手を考えんと」

「ほな、どうしたらエエン」

「そやなあ。何か覚えてへん？ 男の人の服からどんな仕事をしてそうとか、どこかのスーパールの袋を持ってたとか」

友の言葉に、美里は悲しげに首を振った。

「ふつうの服やった。何も持ってなんだ」

「自転車は、そうや、自転車に何か特徴はなかった？ 名前か住所が書いてあったとか」

「ううん、普通のママチャリで、何も書いてなかった……、あ、そうや」

「どないしたん」

「そうや、後ろにおさるさんのシールがはってあったわ、頭のはげた」

「ええっ、頭がはげた？」

「うん、頭のはげたおさるさんが看板持ったシール」

美里の答えに、彼女は首をかしげた。シールはわかるが、頭部の薄くなったおさるとは。

その姿を想像して千鶴は噴き出しかけたが、相手の真剣なまなざしにぐっとこらえた。

「頭の部分のシールがはがれてるの？」

「いいや、シールはちゃんとはってあるんやけど、頭がはげてるの」
その説明に十分納得はいかなかったが、彼女はとりあえず先をうながした。

「で、その看板には何か書いてあったん？」

「それが。なにか数字があったんやけど、何番やったか、覚えてへ

んねん」

美里は口元をしかめた。

「数字の書いたシール？ それ、マンション駐輪場の整理シールとちゃう？」

最近では放置自転車に対する規制が厳しくなり、近所の人間や、駅の通勤通学客らが、ひとのマンションへ勝手に自転車を止めたりすることが多くなった。果ては古くなった自転車を捨てていく不埒な輩までいたりする。やから

このため、管理会社はマンション各戸にシールを配り、部屋番号を書き込むなどして、無断駐輪を防いでいる。

「かもわからん」

美里もうなずいた。

「よっしゃ、ほんならメールで手配しよ。どこかに看板を持ったおさるのシールをつくってるマンションがあるかもわからへん」

彼女らの探偵能力を知って、最近ではクラスの有志が支援グループをつくり、捜査に協力してくれているのである。行方不明猫の捜査のときにも活躍してくれたおかげで、事件は無事解決した。

「自転車に、頭のはげたおさるが看板を持っているシールをつけているマンションがあったら連絡してね」

千鶴は携帯から登録メンバーに、こう発信した。

五

まもなく一人のメンバーから報告が届いた。

あるマンションの自転車シールに、看板を持ったおさるのものがあつたというのだ。だが、頭ははげていないという。

「そらそやろ。なんぼなんでもそんなシール作れへんワ。みさちゃんの見間違いとちゃうか」

心の中でそう思いながらも、千鶴は美里といっしょにメールにあつたマンションへ向かった。

そこは、彼女らの校区からかなり離れた町だった。探偵部員たちが遠くまで出かけ、搜索にあたってくれたのに感謝の気持ちがあった。

だが、美里は落胆の表情を隠せなかった。シールは目撃したものと同じものだったが、頭はふさふさ、動物にふさふさはおかしいとしても、とにかくきっちり生えており、駐輪場にはあの日と同じ色や形の自転車も見当たらなかった。

そのとき、別の友人から頭のはげたおさるさんシールが見つかったというメールが飛び込んできた。

「みさちゃん、あったって」

「ほんと！」

「行ってみよ」

「うん」

二人は駆け出した。

六

そこはマンションといえるようなところではなかった。

文化住宅という、上下に分かれた長屋みたいな建物だった。道路から奥へ長く伸びた建物の前に細い通路が走り、各戸の前に洗濯機が並んでいる。

その一番奥の玄関わきにママチャリが置かれていた。

「あの日の自転車と同じ色や」

美里が小声で叫んだ。

自転車を確かめに行こうとした彼女を、千鶴はあわてて止めた。

「あんたは顔を知られてるからまずいわ。出てきた犯人に見つかって逃げられたらおしまいや。ウチが見てくる」

友を抑えて通路を入って行った千鶴は、自転車のところまで来ると後輪をよく見た。

確かに泥よけにおさるのシールがはってある。玄関から人の出て

くる気配のないことを確かめた彼女は、しゃがみ込むと図柄をじっくりと観察した。そして、美里の言っていたことがやっと理解できた。

後輪についた鍵のキーホルダーが、シールに描かれたおさるの頭付近にぶら下がっている。これが、走っている間にこすれて、もともとちゃんと印刷されていたおさるの頭がはげたらしい。

文化住宅には他にも自転車はあったが、シールをはっていない。わざわざ管理しなければならないほどのスペースを持った住宅でもなく、どうやら別の所から持ち込まれたものようだった。

先に調べたマンションの住民が引っ越してきて、そのまま使っているか、事が事だけに盗難自転車という可能性も考えられないことはない。

携帯で写真を撮ると、友達の待つ通りに戻ってきた。

写真を見た美里は、

「これや、この自転車や」

と叫んだ。

「早う、早よ警察へ行こ。おまわりさん呼んでこ」

「ちよつと待って」

駆け出しそうになった美里を彼女は止めた。

「もし同じ自転車やとしても、犯人が使うてるものとは限らへん。

知り合いの持ち物やったら、仲間に捜してるのがばれてしまうやん。確認してからやらんと」

「そやかて、逃げられたらどないするのん」

彼女はちよっぴり不満げな様子だったが、千鶴の話ももつともだと思い、付近に身を隠して張り込むことにした。

しばらくすると、その家から男が出てきた。美里は身を乗り出した。だが、犯人の男とは違っていた。

「あのおっちゃんやないわ、おさるさんは間違いないのに」

驚いた風に彼女はつぶやいた。

男は、例のシールがはられた自転車に乗って出かけて行った。

物かげから通りに出てきた二人は見送りながら顔を見合わせた。

「ちょっとこの辺で聞き込みをしてみよ。友達の家をさがしてます、あそこの家はウチらと同じ小学三年生の女の子はいますかって聞いたら、ようすを教えてくれるやろ」

「そやな」

二人は聞き込みに入った。

七

次の日、千鶴と美里は、千鶴の祖父徳治の家を訪れていた。

祖父に捜査の報告をし、今後の方針を相談するためである。だが、お重さんはショックで寝込んでいて、三人で対策を練ることにした。「いっしょにいろいろ聞いて回ってん」

「そしたら、その家に住んでるのは若い男と女の人なんやて」

「男の方は、昼間から何もせんと、毎日ぶらぶらして遊んでるらしいわ」

「女はちゃんと働いてるっちゅうのに何ちゅうやつちゃ」

二人は唇をとがらせた。

腕組みをして子供たちの話をうなずきながら聞いていた徳治は顔を上げると、美里にたずねた。

「その自転車に間違いないんか」

聞かれた彼女はきっぱりと答えた。

「色も形も同じやし、マンシヨンのシールを見たから知ってるけど、頭のはげ具合、あ、ごめん」

彼の頭に気づいた美里は口ごもった。

話はそれるが、ここでひと言つけ加えたい。

身体的特徴で、いまだ公けにからかいの対象になっているのは、頭髪くらいである。それも男性に限る。

古くは夜店のステッキからバーコード、最近では欧州一国の首相が記者の頭髪について暴言を吐き大騒ぎになった例を持ち出すまで

もなく、嘲笑の的としてとらえられることが多い。

あれが、もし相手が男でなかったり、顔のシワを、煮え損ないのインスタントラーメンなどと揶揄やゆしたりしたら世間が放っておくことはない。猛烈なる非難攻撃の揚げ句、社会的抹殺、いや実際に抹殺される可能性さえもないのである。

まあ、男は性格鷹揚であるからそのような礼を失した扱いに対しても、ささいな事柄と鼻であしらい相手にしないから事態は穏便におさまっているのだ。

そもそも、毛の少ないほど動物は高等なのである。

熊より猿のほうが知恵がある。猿は道具を使い、食べる前に芋を洗ったりするが、熊にはできない。ご存じの通り、熊は全身毛だらけだが、猿は顔や尻が出ている。

猿より人の方が格段に毛が少なく、当然知的能力は高い。

こう考えてくると、頭髮にハンディのあると思われる方が、実は髪の毛ふさふさの人間より進化しているわけだ。昔は額が広いほど賢いと言われたものである。

もののついでにこの場を借り、代表として、いや薄毛のみなさんの代理として述べさせていただいた次第である。

閑話休題。あだしことはさておき、美里の発言を続けよう。

「消えかかった頭の形が覚えてるのとまったく変わりがないねん。面白いサルやなあと思うてじっと見てたからよう覚えてる。もしかして、仲間がおって、それが乗ってたんかも」

目を輝かせ、彼女は自信たっぷりに話した。

だが、徳治は

「そうか。でも、あんたらの捜査はここまでにしとき」と、子供たちを制した。

思いもかけぬ言葉に、二人は声をそろえて不満の声を上げた。

「なんでえー」

「そんなん、いややあ」

彼女らの大声に彼は身を乗り出し、かんで含めるようにしてさと

した。

「あいつらは怖い大人の犯罪者や。な、子供が自分らの悪事に気づいたとわかったらどんなひどいことしよるかわからん。身の危険もあるんやで」

彼のいつにない真剣な表情に、不服げながらも二人はだまってしまった。

それを見て、

「これからどうするか、ちょっと隣のお重さんそこへ行つて相談してくるワ」

と、彼は玄関を出ていった。

「ちづちゃん、どないしょ。おじいちゃんあない言うてるし」

「うん、ずうっと見張ってるわけにもいかんし、怖いおじさんらしなあ」

二人が困惑していると、しばらくして、戻ってきた徳治は

「あんたら、ちょっと耳を貸し。エエ計略があるねん。これでどうや」

と話し出した。

聞いた二人は、なるほど、あははと大声を上げた。

八

そのころ、問題の文化住宅では二人の男がひそひそ話の真っ最中だった。

「うまいこといきましたなあ、このあいだは。あつという間に二十七万円。ぬれ手で粟とはこのことでんがな」

「やっぱ、仕事は詐欺にかぎるな。この前みたいに夜中、山寺へ忍び込んだのはエエけど、ミイラにからみ付かれるわ、警察に追われるわで、一銭にもならんと逃げてこなんだらあかんなんて最低や」

「コソ泥は割に合いまへんわ」

「そや、犯罪でも空き巣やひったくりの担当は捜査三課やけど、詐

欺とか汚職なんかの知能犯は二課と、位が上なんや」

「偉いんでんな」

「うん、そやからプライドを持たんとあかん」

「へえ」

「ところで、ヨメはん今日はおらんのか」

「いまスーパーに買いもんに行ってますんや。ちよつと離れたところに新しい店がオープンしましてな。なんと、レタスが一百二十八円でっせ。この天候不順で野菜高騰の折に」

昼間から発泡酒をあおりながら怪気炎を上げているのは、どこから見てもうさんくさい男たち二人。一方は、千鶴たちが先日張り込んでいたとき見かけた若いチンピラ、もう一人は、これこそ美里がだまされ詐欺の片棒をかつがされた例の自転車男である。

「そやけど、あんなはした金、いつまでもあれへんで。次の仕事を考えとかんと。いつまでもあると思うな、毛エと金、ないと思うな運と災難というてな」

「あにき、それは親と金の間違いちゃいまっか」

「いや、最近は医療技術が良うなって、みんな元気で長生きしよる。結構なこっちゃ。それよりも、最近髪の毛が薄うなって、この辺りが」

と兄貴分はわきにあつた手鏡を取り、頭へかざし見た。

「いまはエエかつらができてまっさかい大丈夫でっせ」

「何言うてるねん、かつらは高いんや」

「いいやあ、パーティーグッズ店行ったら千円ちよつとでおまっせ」

「あほか、お前ワシに緑色の髪の毛にせえ言うんか」

「冗談でんがな。次はもっと大きなヤマ狙うてがっぱりいただこうやおまへんか。それで上等のかつらを」

「そう思うたら、何かええネタさがせ」

「へえ。そやけど、最近ジジババも賢うなりよって」

「ほんまや、テレビや新聞がワシらの手口ばらして、いらん知恵授けよるさかい、クソッ。近ごろは銀行まであいつらのカタ持ちよる。」

振り込み代、ようけもうけさしたったのに」

二人は額を寄せると、ない頭を振り絞るのであった。

九

数日後、文化住宅に一通の封書が送られてきた。

男が手に取ると、見知らぬ人物のあて名と、送り元には法律事務所の名前があった。

番地が合っているところを見ると、先の住人が住所変更をせず引っ越してしまったため郵便物が届けられたものようだった。

まともな人間なら付箋をつけて郵便局へ戻しでもするのだが、他人のものと自分のものの区別もつかない、この程度の男。なんら気にせず封を切ると、全部読んでしまった。

内容は、こうだった。

前の住人も同年齢くらいの男のようで、その伯父が若いころ南米に渡って、大農園を開拓、莫大な財産を築いた。だが、結婚しなかったため家族がおらず、相続者のないままこの世を去ったという。遺産管理人から依頼を受けた同事務所では長期間にわたる調査の結果、やっとのことであて名の甥おいを捜し出した。ついては、相続の手続きをしたいので事務所までお越しいただきたいとなっていた。

男が跳びあがって喜んだのは、言うまでもない。すぐさま兄貴分に連絡をとった。

「二十万や三十万のはした金やおまへんで。莫大な財産とあるからには、まあ億単位でっしゃろ。これで、ワシらもアパート暮らしの貧乏生活におさらばできまっせ」

「ようやった。棚からボタモチとはこのこっちゃな。そやから言うたやろ。人間まじめにやっとなら神さんは見放さへんて。詐欺とか、コソ泥やら一生懸命働いてたんを見てはったんや」

あわてて駆けつけた兄貴分は、勝手なごたくを並べ大声で笑った。「それで、連帯保証人を一人連れてこいって書いてありまんねん。」

お願いできまっか」

「遺産相続に連帯保証人が要ったんかいな」

「高額遺産のときは必要なんっちゃいまっか。いっしょに行ってくれまへんか」

「当たり前や、行かいでかいな。大事な弟分の出世のためや」

兄貴分も満面の笑みを浮かべた。

「で、もちろんもうけは山分けやろな」

手紙に一通り目を通した彼は、当然という顔つきで向き直った。

「えっ、や、山分け、でっか」

「ワシが連帯保証人になったらんと、ン億円が入って来えへんねんで」

「そやけど、この話が飛び込んできたんはワシんとこで、連帯保証人はだれでも……」

チンピラ男は顔をゆがめ、嫌そうな顔をした。

「なんや、いままで面倒見たったんを忘れたんか」

「そやかて、半々では、なんぼ何でも」

「お前一人で何ができるねん。身分証明書はどうするねん。相手から本人かどうか確かめるものを要求されるんやで」

「あ、そうか。それ忘れてた」

「そやから、おまえはアホやといわれるんや。何も持たんどのこのこ出て行って偽者とばれたらどうするんや。ワシがおったら、免許証でも住民票でも偽造は朝飯前や。何やったら、そいつを始末してお前を完全本人になりすましさせることもできるんやで」

「そ、そんなこわいこと」

「ま、今回は免許証と住民票の偽造くらいで十分やけどな」

「そやけど」

「いややっちゅうんか!」

「いいえ、結構です、山分けで」

盃を交わした契約固い兄弟分といっても、いざ金の話となるとなかなかまとまらん。親子、夫婦でももめるもとがカネ、骨肉の争い

となるのが世の常ですワ。

「で、事務所はどこにあるねん」

「あの、千日前の交番を曲がったところにある天王寺駅前ビル三階となつてまっけど」

「なんで千日前に天王寺駅前ビルがあるねん」

「知りまへんがな。つけたヤツに言うておくんなはれ。千日前に天王寺駅前ビルと名前をつけたらあかんていう法律はおまへんで」

「まぎらわしい」

兄貴分の男は、吐き捨てるように言った。

十

数日後、弁護士事務所と連絡を取った男たちは、千日前の天王寺駅前ビルに向かった。担当者の電話番号が徳治の携帯になっていたのはいうまでもない。

これ待ち受けるのは、徳治と子供たち、さらに、虎の子をかすめ取った男たちをその目で見届けたいと、お重さんも加わった。

事務所があることにしたビルの向かいの建物は、二階が喫茶店になっていた。

先回りして、その窓際の席に陣取った四人は、男たちの現れるのを待ち構えた。ここからだ、相手に見つからず、歩いてくる人をゆっくり観察できる。

「こうして、きつちや店に入るのは久しぶりだな。昔はあの子と、いや、最近コーヒーなんか飲ましてもろうたことおまへんわ」

カップを大事そうに抱えながら、お重さんは表の通りを見下ろしていた。

「来た！ 来た！ あいつら来よったわ」

真っ先に彼らを見つけたのは美里だった。

皆は、大きく開いたガラス窓に顔を寄せた。

男たちが地図を広げ、指差しながらこちらのほうへ歩いてくる。

誘い出し作戦が図に当たった。

千鶴らの目の前で立ち止まると、彼らは向かいのビルを見上げた。

「二階に法律事務所がなかったら、すぐ帰りよるやろから、犯人の後をつけよ。見つからんようにしいよ。気づかれたらパアやさかいにな」

徳治は、小声で皆に念を押した。

「あの年いった方が、ウチに金をもろうてくるよう言いつけたおっさんや」

美里がおばあさんの腕を引っ張った。

「悪そうな顔してるなあ。悪もん面いうたら、あんなをいうんや」

「そやろ。ほんでから若い方が、自転車の持ち主や」

彼女は、うしろに続く若い男を指差した。

「うーん、どれどれ」

と、首を伸ばしてお重さんがその男を見たたん、息をのんだ。

そして、しばらく唇を震わせていたかと思うと、突然声を張り上げた。

「あ、あの子は、あの子は……、ヒ、ヒロシや」

こう叫ぶとお重さんは突然駆け出し、年寄りとは思えぬスピードで階段を走り降りていった。

「危ない、危ないがな。足元がおぼつかんのに、そんなあわてたら」徳治は驚いて止めようとしたが、遅かった。彼女は建物を飛び出すと、男たちに向かい走って行った。

十一

「おじいちゃん、見て、見て」

お重さんの後を追おうとした徳治を千鶴が引きとめ、窓際へ呼び戻した。

窓からのぞくと、ちょうど彼女が男たちのところへ駆けつけたところだった。

「おばあちゃん、あの若い男の方をつかまえて、何やえらい叫んでるワ」

「どこどこ」

徳治は千鶴の指す方を見た。

「男の人、目をまるくしてびっくりしてる。あ、逃げよる！」

美里は身を乗り出して叫んだ。

相手は不意に現れたお重さんに驚いた表情を見せた。

二言三言声をかけられた彼はじりじりと後ずさりをしていたが、突然きびすを返し、走り去ろうとした。

そでをつかんだ彼女は、必死でしがみつき、何か哀願するようなそぶりですぐ男を引き止めようとした。

「おばあちゃん、泣いてはる」

「ほんまや」

少女たちは、事件のことなど忘れ、びっくりしてその光景をながめていた。

「あかんがな、あいつらにワシらのことを知られたら逃げてしまいうるやんか」

徳治はうろたえながらも、他の二人同様、やはり窓の下騒ぎに釘付けになっていた。

「男の人、振り払おうとして必死や。なんでやろ」

「もう一人の人、何が起こったんかわからんから、ぽかんとしてる」

「あ、おばあちゃん、転けた」

「あーあ、スカートめくれてしもうて。……うわあ、えらい色のズロースはいて。恥ずかしー、エエ年して赤のスクランティを。わあ、見てられん。通る人、みんな笑うてるがな。なんでこんな日にスカートなんかはいてくるんや」

徳治は顔をおおった。彼女だって、まさかこんな大騒ぎになると予想はしてなかっただろうし、何をはいて来るかは自由である。

「男のやつら、逃げて行きよるでー。おじいちゃん、早よつかまえて」

孫たちの叫び声に徳治は、はっと我に返った。

「よっしゃ」

三人は店を飛び出し、お重さんのところへ駆けつけた。

「大丈夫か。けがしてないか」

徳治が抱きかかえると、彼女はひざをすりむいて血を流していた。

「ひどいやっちゃ。あいつら、おばあちゃん突き飛ばして、逃げて行きよった」

美里は彼らの逃げ去った先をにらみつけた。

「血が出るやないか。大丈夫か、骨折れてないか」

スカートのすそを直してやりながら、彼は声をかけた。

「あの子、どこ行った、あの子は。あの子は、ウチの命が」

そう言うと、彼女は那场へワツと泣きくずれた。

「ウチひとり残して、家出ていってしもうて、あの子は、あの子は」
彼女はこう繰り返すだけで、あとは何を聞いても答えようとしなかった。

「あいつらの住んでるとこはわかってるさかい、大丈夫や。ワシらが捜してるいうことは知りよれへんし」

この言葉にただうつむいて涙を流し、彼女はうんうんとうなずくだけだった。

十二

いったん家に帰ったお重さんは、汚れた衣服を着替え、風呂屋へ出かけた。

その興奮状態が落ち着いたら、徳治らは男たちが逃げてしまわないうちにすぐ彼らの家へ駆けつけようとしたが、彼女は身をきれいに整えてからでないと行きたくないと言い張った。

こんなときに悠長など皆は不審に思ったが、その意志があまりにも固いので仕方なく帰ってくるのを待って、若い男の文化住宅に向かった。

近くまで行くと、他の者は通りで待ち構え、お重さん一人が家に入った。

「あの人、おばあちゃんの子供やったん？」

「そうやったんや。死んだとか、いろいろ言うと思ったけど、息子に出て行かれたのをみんなに知られとうなかったんやなあ」

しみりとした口調で、徳治はつぶやいた。

「わが子と再会してみれば、なんと犯罪者、それも自分の金をだまし取った犯人とは」

「おばあちゃん、かわいそうに」

「こんなことやったら、犯人捜さんといたらよかった」

よかれと思ってしたことが彼女をかえって苦しめる結果になってしまい、子供たちも落胆を隠せなかった。

「まあ生き別れになってた息子と会えたんやから、良かったともいえるで」

孫たちの落ち込んでいる様子を見て、徳治はなぐさめた。

「そんな息子でも、いざ改まって会うとなったら、むさくるしいところは見せとうない。さっぱりとこぎれいにして出てくるんやから、やっぱり母親やな」

いったんは逃げ去った男だったが、落ち着いて会ってみると、そこは親子。水入らずで仲良く話し合っているのだろう、そんなシーンを思い浮かべ三人の目がうるみかけた、そのときだった。

ガラガラ、ガッシャーン。

玄関のガラス戸が割れ、フライパンと土瓶が飛び出してきたかと思うと、若い女が転がり出ててきた。

そのあとを追うかのような甲高い声。

「ウチの男を盗りやがって、この小娘が！」

三人は驚いた。

「あれはお重さんの声や。何でけんかしてるんやろ」

すると、突き飛ばされた女が立ち上がると、怒鳴り返した。

「うるさいわい、この色気ババ。息子より若い男のしり追いかけて回

して恥ずかしいないんか。しわくちゃ面に口紅まで塗りよって」

その悪態にたまりかねて、

「なんやとー」

と、飛び出して来たのはお重さんだった。

「ヒロシは、ウチの可愛い男や。お前みたいな性悪女にだまされて出て行ったけど、ほんまはウチの方がエエはずや」

「何いうてんねん。自分のトシ考えんかい」

二人は相手をにらみつけてののしり合うと、またお互いの髪の毛を引っ張り、部屋の中からのけんかが続けた。

「あれえ、おばあちゃん、どないなってるんやろ」

「あのおばちゃんだれ？」

「なにや、話がややこしなってるみたいや。こらあちよつと、複雑や。子供は見ん方がエエ」

「あ、おっちゃん出てきた」

「二人引き離すのとかと思うたら、下駄持って逃げ始めたワ」

「なんちゅうやっちゃ」

男は、二人がつかみ合いをしているのを尻目に履き物を手にはだして逃げ出した。女たちは、けんかに夢中で彼が逃走していくのに気づかなかった。

十三

「で、それからどうなってん」

次の日、徳治の家を訪ねてきた向かいのサブやんは事の成り行きを尋ねた。

「いや、それが予想してたんとは大違い。ばあさんの息子やとばかり思ってたんは、実はオトコやったんや」

徳治は声を落とし、親指を立てた。

お重さんは、家で寝込んでいるはずである。長屋だけに、隣の壁は薄い。ちよつと大きな声を出すと、話は筒抜けになる。

大立ち回りの後、元気とはいっても、さすが年の差。若い女に負かされてしまい、齒ぎしりしながら、徳治たちに抱えられて帰宅したのである。以来、布団をかぶったまま寝込んでいるはずである。帰宅途中、ぽつりぽつりと彼女が語ったところによると、話はこういうことだった。

十年ほど前、まだ少しは色気の残っていたお重さんは、裏通りで店を開いていた。そこへ転がり込んできたのが、例の男である。

孫といってもいい年ごろの若者だったが、それはそれ男と女の不思議なところ。ついデキてしまった。

というより、男のふところが苦しかったのが大きな理由だった。女の稼ぎで、男は日がな一日酒を飲んでぶらぶらと暮らし、夜になると怪しげな場所に入入り。結局、バクチでお重さんの貯金をすべて使い果たしてしまった。

金の切れ目が縁の切れ目は、人の常。搾り取るだけ搾り取った揚げ句、家の権利書までも持ち出してプイといなくなってしまった。

若いオトコに逃げられたショックでげっそりとやつれたお重さんは、一度に年を取ったのか容色とみに衰え、この長屋へ流れ着いてきたのだという。

「そのかわいい男に再会したと思ったら、自分の金を巻き上げた詐欺仲間の一人とはなア」

「そうやねん。二重のショックや」

徳治は相づちを打ちながら、うなずいた。

「それだけ痛めつけられながら、警察には言わんといってくれと、泣いて頼んでんねんて？ まだ未練があるんやなあ」

「いくつになっても、女は女なんや」

「そや、女は灰になるまで女や、男はただのジジイやけどな。外見ではもうとつくに女の籍は抜けてると思うとったけど」

「もうすっからかんになってしもうて墓買う金も残ってないて泣いてたわ。死んだら、満腹寺へ納骨してほしいんやて」

「満腹寺いうたら、あの骨墓で有名な」

「そや、納められた遺骨で墓をつくるあの骨墓寺や。あんたも身寄りが無いし、入れてもうたらどうや」

「いや、ワシはかんになんしてもらうワ」

「なんでや、無縁仏になつてさみしい思いするより、毎日毎日お参りに来た善男善女が線香をあげて、手を合わせてくれるんやからさびしのうてエエで」

「汚らしいオヤジの臭い足の裏の骨の横にでも混ぜられてみいな、未来永劫苦しまんならん。そら若いべっぴんさんの胸の骨の横を予約できるんやったら、今からでもお願いするけど」

くっくくくくくと、最後はしのび笑いを隠しながら二人が小声で話し合っている隣の台所では、テーブルを挟み千鶴と美里がポテトチップスをつまんでいた。

「男は灰になるまでアホな生物なんやな、ほんまに」

美里は吐き捨てるように言った。

「いつも頭にハイビスカス咲かせてるて、お母ちゃん言うてたとおりや」

千鶴もあきれ顔でクッキーをほおばった。

「でも、おばあちゃん、ほんまにかわいそうや」

「まだ寝込んでんのんちゃう？」

二人が顔を寄せ合いながら彼女の心配をしていたそのころ、隣家ではお重さんが畳をめくり上げて、下に隠していた札束を引っ張り出し、勘定していた。

「オトコは逃げてまいよった。やっぱり頼りになるのはカネや。この子らがウチの一番かわいいやつちゃ」

彼女は、ぐっと虎の子たちを抱きしめた。

「ひとが見たらカエルになるんやで。ええ子やからな。いっしっしっしっ。ちゅっちゅっ、ちゅっ」

古いおまじないをしたかと思うと、彼女は数え終わった日本銀行券に何度も何度も口づけをするのだった。

(おわり)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2065v/>

詐欺男をさがし出せ ～千鶴と美里の仲良し事件簿～

2011年7月29日00時26分発行